

## 「ギャロップを楽しむ子どもたち」

## — 三学期の保育の視点④より —

クラスの集いの中で、ギャロップ（馬の駆け足のステップ）を楽しんだことがきっかけとなり、馬やカウボーイになることが楽しくなってきました。

お弁当を食べ終えた午後のこと、私が部屋にいるとAちゃんがやってきました。「せんせい、見てて、ぼくの足音、本当に馬が走っているみたいに聞こえるよ」と言い、部屋の中をギャロップをしながら回りました。『タッタ、タッタ、タッタ、タッタ』と確かにAちゃんの足音は馬の足音のように聞こえます。私は「本当ね、私もAちゃんの後ろをついて行きましょう」と言ってAちゃんの後ろにギャロップしながら続けました。

Aちゃんは今までお話の世界を想像したり、イメージしながら遊ぶ楽しみを知らなかったのか、何かになりきって遊ぶことをほとんどしませんでした。私は、そんなAちゃんが、馬に乗っているようにギャロップしている姿を見て、嬉しくなりました。そしてもっと楽しめるように支えたいと思いました。

2人で「おんまはみんなばっばかはしる〜♪」と歌いながら、部屋の周りを走っていると、「何してるの〜？」とBちゃんがやってきました。Aちゃんが「馬みたいに走っているんだよ」と言うと、「ふ〜ん」とBちゃん。私が「一緒にやらない？」と言うと「ぼくはいい!」とBちゃん。Bちゃんは、その場からじっと見えています。私はAちゃんに「馬はやっぱ広い野原で走った方が気持ちがいいんじゃない？」と言うと、Aちゃんは「そうだね、じゃあ外へ行こう」と言いました。2人で外靴に履き替えていると、「ぼくもいくー」と言ってBちゃんも外へ出て来ました。



Aちゃんは「せんせい、一緒に馬のレースをしよう」と言いました。「いいわよ」と私。Aちゃんは手綱を持つように手を出し、「よーいどん」という私の掛け声と共にギャロップで芝生の周りをまわります。Aちゃんはとても嬉しそうです。Bちゃんも「ぼくもやってみようかな〜」と入って来ました。今度はAちゃんとBちゃん2人がスタートラインに立ちました。よーいどん」に合わせて

2人はとびだしました。そして、その後2人はくり返しギャロップを楽しみました。

次の日、AちゃんとBちゃんはホールの積み木で馬小屋を作り、馬ごっこをしています。AちゃんとBちゃんだけではなく、たくさん子どもたちが、同じお話の世界を友だち、または保育者と共に表現し、楽しんでいきます。クラスの集いがある手立てのきっかけになることもあることを思い、見通しを持って豊かな時を計画していきたいと思えます。

「雨の音を楽しむCちゃんとDちゃん」 — 三学期の保育の視点⑥より —

一年を通して、子どもたちと季節の移り変わりを五感で感じる生活を大切にしてきました。冬空を子どもと見上げ「雲が一つもないきれいな青空ね」と眺めたり、はだかの桜の木の枝を見て「庭の木の枝よく見ると～硬いからに囲まれた小さな木の芽が見つかった～♪」と『まもり』のさんびかを歌ったり、保育者が感じていることをことばにして伝えていきます。

雨の日のこと、木工室にいた私は木工を終えたCちゃんと窓の外を眺めていました。Cちゃんは「晴れてたらブランコしようと思ってたのになー」とつぶやきます。窓の外を見ると、屋根からたくさんの雨水が落ちていました。私はCちゃんと雨の日を楽しみたいと思い、年長組のテラスからフライパンを持ってきて、雨のしずくがフライパンの底に当たるように置いてみました。それまで「ピチャ、ピチャ、ピチャ…」と聞こえていたしずくの音が、フライパンに当たると「ポトン、ポトン、ポトン…」という音に変わりました。Cちゃんの目がきらっと輝きました。「音が変わった」とCちゃん。「そうね」と私。

2人で少しの間、「ポトン、ポトン、ポトン」という音を楽しんでいると、Cちゃんは、辺りを見回し、テラスの食器棚からお鍋を持ってきました。そして私がしたのと同じように落ちてくる雨水をよく見て、さっとお鍋を置きました。「ポト、ポト、ポト…」フライパンに当たるしずくの音とはまた違います。「面白い音ね～」と私が聴いていると、それを木工室から見ていたDちゃんも出てきて、テラスに行き、食器や鍋、ボールをしずくが落ちる下に置いて行きました。

時々しずくが2人の顔に当たると「ひゃー冷たい」と笑い合う2人でした。やがて、しずくが食器やお鍋に当たる音が重なって響きました。「雨の音楽会みたいね」と私が

言うと、Cちゃんは「雨の日も楽しいね」と言ってにっこり、笑いました。

この日の帰り、Cちゃんはお迎えにいらしたお母さまに「来て、来て」と声をかけ、雨の音楽会をした場所へと引っ張って行き、雨の音楽を聞いてもらっていました。

いつもと変わらない雨の日でも、保育者の捉え方や、子どもへの声のかけ方によって、楽しくなったり、子どもたちの中に遊びや物語が生まれます。保育者は時をとらえ、ことばをかけようと心がけています。子どもたちと心を通わせ、雨の日ならではのひと時を過ごせた嬉しい時でした。

(安東 直緒)

